

8 月 15 日を迎えました。この日を終戦記念日と呼ぶか、それとも、敗戦記念日と呼ぶか、その呼び方についてはそれぞれの考え方、立場によって違いはあるのでしょうか。では、私たちにとっては、この日はどんな意味を持つものなのでしょうか。

今、多くの日本人にとって、先の大戦は身近なものではありません。遠い過去の出来事であり、それゆえ、大半の国民にとっては、自分とは直接関わりのない出来事になりつつあるように思います。それゆえ、作家の保阪正康さんは、戦争の記憶について第一次継承、第二次継承、第三次継承ということを最近声高に仰っているのですが、それは、先の大戦については、絶対に忘れてはならないとの強い信念をお持ちだからです。そして、それは、保坂さんだけではありません。戦争を直接体験された人々の多くがこの思いを強く持っている、そして、その思いの強さは以前にも増して強くなってきている、それは、戦争の記憶が私たちの中でどんどん薄すれてきているからです。ですから、同じ轍を二度と踏まないためにも、私たちは、この世のそうした風潮に抗わないわけには参りません。しかし、その一方で、毎年多くの人を集めているのが靖国神社です。そして、21 世紀に入ってから、戦争などまったく知らない 20 代、30 代の若者が数多くこの日靖国神社を訪れ、「英霊に」祈りを捧げているとのこと。ですから、そういう意味では、かつてあった悲惨な出来事は歴史の中に埋没したわけではありません。形の上でもしっかりと若い世代に受け継がれている。しかし、もちろん、私たちはそれを諸手を挙げて喜ぶことはできません。忘れないとの意味合いが、私たちとは正反対のものでもあるからです。

そこで、皆さんにお尋ねしたいのですが、皆さんは靖国神社を訪ねたことはありますか。靖国神社を訪ねた人たちのどれくらいが気づいているかは分かりませんが、靖国神社の大鳥居の横には九段教会があり、そして、そこには十字架が抗うように立っています。ですから、そういう意味では、私たちは手をこまねいてきたわけではありません。靖国神社の横でしっかりとその存在をアピールし続けてきたわけです。それも、戦争が終わってからではなく、それ以前から十字架は掲げられてきたのです。けれども、かつて多くの人々の記憶の中心にあった先の大戦への特別な思いは、今や他のものに置き換わりつつあるのもまた確かなことです。それゆえ、私たちは自らの力不足を思わずにはいられません。しかし、そうであるからこそまた、その理由を知るために、一度は靖国神社を訪ねていただきたいと思うのです。そして、そこで、是非、足を運んでいただきたいのが拝殿の手前右側にある遊就館です。

そこで思われることは、終わったものが終わらずに続いているということ。私は、この終わったものが終わらないかのように訴えてくるところに、得体の知れない不気味なものを感じさせられたのですが、この得体の知れないものを生かし続けているものが、かつて私たちが大義と呼んだものだと思います。けれども、人間の尊厳を奪う戦争にはいかなる大義もありません。ましてや、そこで語られた大義が、嘘の上に嘘を塗り固めたものであったわけですからなおのことです。けれども、だからこそまた思ったのです。では、大義に生き、死んでいった人たち、かつて英霊と呼ばれ、人々の尊敬を集めた人たちの死を犬死と決めつけていいのでしょうか。また、それに対して残された人々は大義の犠牲者だった

のでしょうか。人々の中から戦争の記憶が薄まりつつある今、靖国神社が特殊な場でなくなりつつあるのは、犠牲者だと思ふ多くの人々が、かつて英霊と呼ばれた多くの人々の死を犬死と蔑んだ結果であると言われていています。しかし、その死の意味づけを求める人々に対し、しっかりとした意味を与え続けてきたのが靖国神社でもありました。従って、今、多くの若者がこの日靖国神社を訪ねるのは、世の中が変わったからだけではありません。靖国神社がどういう形であれ、一貫して変わらぬ姿勢を持ち続けたからです。それゆえ、記憶が薄まりつつあるこの時だからこそ、私たちはまたこのことをしっかりと覚えたいのです。

これまで私たちの多くがなしてきたことは何であったのか、敗戦を終戦と呼び、一億相懺悔と言って憚らなかったのは、私たちが目先の受け入れやすいものだけを受け入れてきたからではなかったのか、また、そうした風潮をもたらしたのは、私たちが現実を現実として受け入れること拒んできたからではないか、つまり、私たちがもし今のこの状況に抗うとするなら、一方的に自分の言いたいことだけをまくし立てるのではなく、それが得体の知れない気持ちの悪いものであっても、一端は飲み込んでみる必要があるのではないかということです。それは、それも私たちの歴史の一部であり、今靖国に集まる若者も主は拒んではいけないからです。ただし、もしかしたらそれは私たちにとってはとても危険なことなのかもしれません。ミイラ取りがミイラになってしまう危険性があり、また、伊達や酔狂でできるものでもないからです。しかし、かつて今も変わらずに私たちの周りにあるものは、先ほど、飲み込んでみてはと申しましたものでもあるのです。そして、私たちはそれをこれまで飲み込んできました。それもよく分かった上で飲み込んできたのです。ですから、それを思えば、付き合い方を考えることはできないことではありません。従って、飲み込みにくい理由は他にありま

す。それは私たちが食わず嫌いだからかもしれないませんが、けれども、戦争の記憶が薄まりつつある今、そこにはまた別の理由があるようにも思うのです。

私たちがこの飲み込みにくいものを飲み込まないのはどうしてなのか、それは、戦争の記憶が薄まるのと軌を一にするかのように、かつて気になって仕方なかったものが気にならなくなってきたからです。それゆえ、それは、靖国の問題だけではありません。かつて私たちが嫌悪した多くのものが今ではそれほど大きな問題となっははいないので。それが、今日の御言葉の中でイエス様を取り上げている1番目(姦淫)と2番目(離婚)についてでもありますが、それゆえ、このイエス様が仰っていることを人々が仮に関心を持ったとしても、一通り騒いで自分の気持ちが収まれば、すぐに忘れられてしまうのはそのためです。つまり、本気で御言葉、社会と向き合っていないということです。けれども、かつては違いました。この気持ちの悪さを抱え続ける人は大勢おりました。ですから、それを抱え続けることは、そうした私たちの努力なしになしえるものではありません。ダメなものはダメなのです。けれども、どれほど努力したとしても、それがいつまでも続けられるものではありません。戦争の記憶が薄まりつつあるのがまさにその点を物語っているようにも思います。では、どうしたらいいのか、そこで、忘れてならないことは、私たちは戦い続けなければならないということです。しかし、この戦いは、勝ったとか負けたとか、誰がいいとか悪いとか、そういうものではないということです。

そもそものところで言えば、76年前のこの日、一つの終わりが示したことは何であったのでしょうか。それは、命の尊厳が回復されたということです。そして、この命の尊厳を今までも、そしてこれからも守り続けておられるのが私たちのイエス様でもあるのです。少なくとも、私たちはそう信じているわけです。

が、それゆえ、8月15日は、私たちにとっては命の尊厳が回復された日だと、私はそう言っていてと思っています。そして、それについては、今日の御言葉もまた同じようにしっかり語ってくれています。あらゆる関係性の構築とその維持については、それが命に関わるものである以上、神様の摂理と無関係ではあり得ないからです。しかし、この日の御言葉が扱うことは、戦争というあまりに大きな出来事と比べたら、私たちの日常に潜んでいる本当に小さな小さな出来事です。それも、極めて個人的なレベルの事柄であり、それゆえ、戦争という、この大きな出来事と直接関連付けることは難しいようにも思います。しかし、本当にそうなのでしょうか。十戒がそこに記されていることの優劣を問わないように、私たちの命の尊厳を保つことに大きい小さいはありません。むしろ、この小さな事を真面目に真剣に受け止めるところからしか見えてこないものがこの大きなものなのではないのでしょうか。なぜなら、十戒が弱い者への配慮に満ちているように、弱い人々の「もう勘弁して欲しい、二度とごめんだ、こりごりだ」という、人々のこのささやかな思いから現れ出るのが戦争の悲惨さでもあるからです。

ですから、私たちがもし戦争の悲惨さを世の人々に伝えたいなら、飲み込みやすいものだけを飲み込むのではなく、この「もう嫌だ、懲り懲りだ、勘弁してくれ」という、この飲み込みにくいものを飲み込む必要があるのです。そして、そのために求められていることが、この居心地の悪いものを遠ざけずにそのすぐ近くに居続けるということです。なぜなら、かつて、八紘一宇、五族協和と謳ったその大義が嘘と誤魔化しであったように、小さなことを顧みず、大きなものだけを眺めるだけでは、結果辿り着くところは、イエス様の望むものではないからです。なぜなら、そこに必ず嘘があり、嘘がある以上、嘘に嘘を重ねていくしかないからです。そして、私たちにはそういうところがあり、そのことをイエス様

はよくご存じでもある。まただから、私たちが自分の内側に隠しているこの小さな事をここで大きな事としてこととして、この日語ってもおられるのですが、それは、私たちが、この自分自身の誤魔化しを、空虚な自分を満たそうとして付いてしまう嘘を避けられず、神様の祝福に与るべき命を深く傷つけるものでもあるからです。

従って、ここでイエス様が仰っていることは私的な秘め事に対してのことではありません。私たちがこうして生きている現実の捉え方そのものを伝えてくれているのであり、そして、それがイエス様と共にあるということです。それゆえ、そこに大きい小さいの違いはありません。示されているところが私たちの置かれた現実であり、従って、私たちの犯すあらゆる間違い、過ちはこの現実を見失ったところから生じることにもなるのです。主の御前における不誠実な態度が同一線上で語られているのはそれゆえのことであり、そして、この延長線上に置かれているのが命の尊厳を深く傷つける戦争というものでもあるのです。ですから、イエス様の仰ることは至極まっとうなことで、それが分かれば細かな説明を要しません。イエス様が最後のところで「然りは然り、否は否」と仰っておられることは、まさにその通りであり、それゆえ、多くの人々にとっては、ここでイエス様の仰ることは全て肯けるものだと言えるでしょう。

しかし、大半の人たちはそうであっても、ここに記されていることに該当する人たちはどうでしょうか。ここでイエス様を取り上げている問題は歴史を通じて繰り返されてきたことです。しかも、教会だけが例外だとは到底言えないのは皆さんもよくご存じのことです。だから、主の御前にあって誤魔化しがあってはならないのですが、では、どうすればその誤魔化しを正すことができるのでしょうか。イエス様がここで仰っていることは見えるところだけでなく、見えないことを含めてのことなのです。ですから、そ

ういう意味では、私たちには何が誤魔化しで、何が誤魔化しでないかは分かりません。そもそものところで言えば、それがあるのかないのかも分からないのです。ですから、ここに記されていることが分かったときの私たちの過剰な反応は、分からないものが分かってしまったがゆえの戸惑いだとも言えるのですが、では、私たちが分かろうとするその一連の行動は、それ以上一体何が分かりたいというのでしょうか。それは、分からないことのもどかしさを解消しようとしてであり、つまりは、自分自身の空っぽな心を何かで満たそうとしてのことであるということです。ですから、かつての隣組のように、時に私たちがイエス様がここで仰っている二つのことに過激な行動を取ってしまうのは、宗教的空白に耐えかね、その空虚さを満たそうとしてのことでもあるのです。ですから、それは、自分自身の空しさを解消しようとして陥る不倫やそれに伴う結婚の解消と何が違うというのでしょうか。正義、正しさという拳を振り上げた結果、振り上げた拳が命の尊厳を深く傷つけることから分かるように、空しさを解消するがための正義は、神様に対する不誠実さの裏返しであり、それゆえ、自分自身の気持ちを見たそうとしてなされるあらゆる誓いは自分自身への偶像崇拜に他ならないことにもなるのです。

従って、イエス様がここで仰っていることは、宗教的に誰が汚れているかということではありません。イエス様から見れば、すべてが罪深く汚れている、つまり、ここでのことは、私たちすべてがいかに小さなものであるかが詳らかにされているということです。それゆえ、ここでイエス様が仰るように、そのままではこの先地獄に投げ込まれるか、それとも落ち込むか、二つに一つということになってしまいます。そして、イエス様が仰るように、それも私たちの現実ではあるのです。けれども、イエス様が私たちを導こうとされているのはどこなのでしょうか。確かに、地獄は一つの可能性とし

て私たちに残されています。そして、私たちの卑しさ、欠けの多さ、その小ささがその理由でもあります。けれども、私たちのこの小ささはただ小さいだけのものではありません。イエス様は、私たちが小さいがゆえに私たちと共にいてくださり、最後の時までを共に歩んでくださっているのです。まただから、命の尊厳を脅かすような嘘、神様によって結び合わされたあらゆる関わりを破壊するような誤魔化しを私たちは何としても避けなければならない、それは、イエス様が小さい私たちと共にいてくださり、そして、そのイエス様のことを私たちがこうして日々見つめているからです。

では、どのようにして私たちはこの嘘と誤魔化しを避けることができるのでしょうか。それには、自分自身が小さいということをイエス様の御前にあって正直に認めることです。そして、そういう自分自身をイエス様にすべてお任せするということです。虚しい嘘と自らを大きく見せようとする誤魔化しは、小さいことを恥ずかしく思い、イエス様への信頼を欠いたところから出てくるものだからです。しかし、イエス様がここで仰っていることは、その私たちと共にイエス様はあるということです。だからこそ、またこの小ささを認める私たちの将来は、イエス様が共にあるがゆえに開かれていくのです。ですから、この小ささに空しさを覚えるのではなく、むしろ反対に、小さいがゆえの希望を感じていいし、感じるべきなのです。なぜなら、なかなか認められないこの小ささを私たちが飲み込み、「然り、然り」「否、否」と、神様の御心に答えようとするとき、そのとき、イエス様は喜んでその私たちのことを用いてくださり、結果、私たちだけでなく、あらゆる命が神様の祝福の中に置かれることになるからです。ですから、そのためにも、大きい小さい、勝ったか負けたかに拘るのではなく、小ささを誇り、私たちと共にあるイエス様のみ後に従って参りたいと思います。